



第三十九章

混沌·後編

Salamander in the circle

### 第三十九章の登場人物

ダーヴェ	……	ネウトラ評議会・学術調査団の団長	上級賢者
ヒューダー	……	学術調査団の団員	民族・言語学者
ヤスウ	……	学術調査団の団員	
マミヤ	……	ホシナ族の娘	
バルダリス	……	元・メッサナの総督代理	
コモラ	……	前総督バンテオラの顧問	最高賢者
メンドルブ	……	『化学者の館』の元代表	
シバド	……	ベレオーサ市総督	
ドゥル	……	シバドの兄	ベレオーサ家当主
レル・ヴァリス	……	エウメロスの王室付近衛隊長	

### これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長	マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻	
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち	
エウメロス王国	ヘルガ	王女	ゴン	ホシナ族の男	(ヤサカオ族出身)	
	カール	王子	サノヒコ	王に仕える役人		
	ヴァリス將軍	レルの父	フツヌシ	王に仕える者	將軍	
	ロウナス	国務省の高官	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長		
	アンテロ	レルの副官	チドリ	アマセオの妻		
	摂政	亡国王の弟	ハマツ	チドリの養父		
ケストル王国	パウル	国王	タマシギ	ハマツの妻子		
	ウルリク	第三王子	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者		
	ヘンリク	ウルリクの息子	コタエ	〃		
	ホベオクー	ケストル人の美女	スクナ	〃		
黄金門市	ソルト	闘技場の警備隊長	アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟		
	皇帝	皇帝	メッサナ市	バンテオラ	メッサナ市の総督	
	バソネル	バイスロイの参謀		メルノ	音楽家	
		バラム&バランケ		双子のジャガー	バンテオラの部下	
アンバレオ	ソラン	祭祀長	アルチニア	『化学者の館』メンドルブの側近		
			冥界	冥界王	冥界の王	
				ベネトナシュ	死神	
				テクトリ	最下層ミクトランの主	
		プラトニオ		メッサナを追放された化学者		

## 目次

### 混沌・後編

562.

563.

564.

565.

566.

567.

568.

569.

570.

571.

572.

573.

574.

第三十九章のあとがき

これまでのあらすじ

奥付

## 混沌・後編

562.

『——最終日の前夜、捕虜となった敵戦士らは豪華な衣装を着せられて神殿の中庭に連れてこられ、夜通し歌い踊る。夜が開けると戦士たちは整列し、一人一人、火の神の神殿の階段を登っていく。そして衣装をすべてはぎ取られ、燃え盛る炎の中へ放り込まれる。それから鉤棒で火の中からひきずりだされ、台の上に横たえられて胸を切りひらかれ、取り出された心臓が火の神に捧げられる——』

アステカ 第十の月 ショコトル・ウェツイの祭祀より

\*

大祭の儀式はベレオーサ市金星神殿……あるいは金星ピラミッド……で行われる運びとなった。

儀式のなかでもっとも重要だとされる『神々の捧げもの』がどのようなものか、まだ誰も知らない。だいたい五十二年に一度のことであるし、前回参加した者でもその記憶はひじょうに曖昧だ。希少な重大儀式なのだから鮮明に覚えていてもよさそうなものだが、華々しさや荘厳さのほかにはところどころ穴が開いたように曖昧な記憶しか残っていないのだった。複数の人間が集まって記憶を披露しあっても似たか寄ったかの曖昧さで、全体像が復元されるということはいになかった。

冒頭に掲載したアステカの『ショコトル・ウェツイの祭祀』の様子は、かつて神々に贈り物を捧げた儀式の、遠い残像である。

### 563.

金星神殿は『火の神』の神殿に塗り替えられた。アンベレオ人たちはこの二つは同じものだという認識があるから儀式がそこで行われるのは当然のことだった。

前夜、イリチャは祭司長ソランと共に、この神殿を訪れた。下見という名目で。神官のリハーサルは前の前の晩に既に済んでいる。リハーサルが済んだ深夜、無人となった神殿をバイスロイが訪れたのだった。

バイスロイが祈った場所でイリチャは立ち止まった。そこで彼の痕跡を感じた。彼が何に苦悩し、父なる金星に何を祈ったか、イリチャはまざまざと感じた。そしてその後、彼が古い友人らに出くわし、取り巻かれ、裏切り者め、あるいはインチキ野郎め恥知らずめと口ぎたなく罵られ、殴打され、鋭い黒曜石で刺されたこと。

イリチャは眼前で繰り広げられる過去の映像を前に、必死に（いけない！）、と叫んだ。（黒曜石をそんなことにつかっちゃいけない——！）

ホシナ族は黒曜石を神聖なものと考えていたし、それで人間を故意に傷つければ相応の罰が下されると考えていた。相手の命を奪うなど、恐ろしいことだった。そして黒曜石の刃はバイスロイに致命傷を与えた。

イリチャは両手で顔を覆って呻いた。（友人だと思っていた人たちに——バイスロイさん——ぼくのせいだ——）

低い笑い声。（誰のせいでもない。こうなることはわかっていた。自分で蒔いた種、身から出た錆、というやつだ）

(……………)

（保身からついたウソがことの始まりだった。多くの人々の心を傷つけるという大きな罪を、私は犯した。その償いをするために、肉体を去ったのだ）

なんだかホシナ族で聴いた話に似てる、とイリチャは思った。それもそのはず、ホシナ族も金星神を信奉していたのだから。

（人類は大きな過ちを犯した。評議会の原子爆弾はその最たるものだ。核爆発が破壊したのは物質界だけではない。時間軸はよじれ、空間に歪みが生じている。そしてアンベレオの『神々の再来』の祭祀もまた然りだ）

（『神々の再来』祭も過ちだと——）

（いうまでもない。イリチャ、自分以外の者の命を、犠牲として捧げることが、正しいと思うか？ それを受け入れられぬゆえに、きみは苦しんでいるのだろうか？ きみにとって何が真実だ。実の父が人間の血を欲することか、それとも、それは間違っていると感じる君自身か）

（イリチャ。犯した過ちは無かったことにはできない。正されねばならないのだ。人類を導いてきた金星神は、まさに人類を導くために、手を下すだろう——）

何が真実かと問われ、イリチャは宙を仰ぐ。

(バイスロイさん——『彼』はぼくを息子と呼び、大きな権力をくれた。でもぼくは——どれも受け取れない！)

イリチャは激しく首を横に振った。

(そんなものを受け取ったら——ぼく自身が壊れてしまう！ だから、いらない！！)

(それがきみの真実なら、その道を進むがいい)

それはバイスロイであってバイスロイの背後からこぼれる目もくらむ光輝。

冥界王に逆らうことになろうと、人類の歴史と人民の心に多大な影を落とすことになろうと、火の聖霊よ、浄化と破壊の元素霊よ、そなたの心のままに、進め！

565.

「あたし、行きます」

ふいにマミヤはつぶやいた。皆の視線がいつせいにマミヤに集まる。

「あたし、行って、シパドに会うわ。そして、話すわ、誤解を解くの」

パルダリスは目をマミヤに据えたまま、ゆっくり首を振った。実際シパドと対峙した彼は、シパドとの対話など不可能だということを嫌というほど知っていた。対話どころか——

「立派な考えです。マミヤ。けれど私は賛成できません。シパドは危険な種類の人間です。彼女は殺すためにあなたをさがしているのですよ。対話が成り立つとは思えません」とダーヴェ。その隣でヤスウが深くうなずいている。

「……そうね」、とマミヤはちょっとほほ笑んだ。その横顔を見ていたヒューダーは、彼女が、泣き、困惑し、憔悴し、眠った末に固めた決心なのだと感じ取った。彼女の表情は澄んでいた。

「もう一度、会って、話さなきゃ、って、牢屋の中でずっと考えてたの。シパドは今、あたしを探している。だったら会いに行くわ。彼女はバイスロイさまを本当に……もし、あたしを見つけ出せなければ、ほかの人が犠牲になるかもしれない。ひとを本当に愛していたのなら、そのことで誰かを傷つける、そんなことをしてほしくない」

「——会ったとたんに殺されるかもしれん。対話が成り立つとは、オレにも思えん。世の中にはわざわざ関わるべきではないタイプの人間というのがいるが、シパドはまさにそれだ。バイスロイでさえ命を落としたのだ。マミヤ、それでも行くのか」

マミヤはヒューダーの問いにうなずく。なんの逡巡もなく。「ええ」、と。

「そうか。いい度胸だ。いい覚悟だ。ならば、オレも行こう」

皆が、え、とヒューダーを見た。ヤスウはマミヤとヒューダーの間を、目を行ったり来たりさせながらぼうぜんとつぶやいた。「正気の沙汰じゃねえよ——」

「いやまったく。正気の沙汰ではないなあ」

それは地下へ避難した八人の、誰の声でもなかった。

レル・ヴァリスは歯ぎしりした。パルダリスのケガに精神を集中させていたために周囲への警戒を欠いていたのだ。この期に及んでなんという体たらくだ！ と、想像の上で自分をぶん殴った。シパドの部下に跡をつけられていたとは！

566.

相手は三人。いずれも抜け目のない目をしている。上背があり、よく鍛えられた逞しい体つきの兵士たちだがアンベレオ人ではない。アンベレオ人はこういった類の肉体労働には外国人をよく雇っていた。ことにベレオーサ家の給料はそれほど高くないので、行く先々で掠奪が起こるのだった。ドゥルなどは、それは給料のうちだと公言していたくらいだった。

「どうやら話が通じる人たちじゃあ、なさそうですぜ」

ヤスウはゆっくりと立ち上がった。ダーヴェが「同感ですねえ」のんびりと応じる。そして周囲の者たちに声をかけた。「皆さん。ここはヤスウと私がなんとかします。さ。行ってください」

「パルダリスさん、高尚な芸術品にちっと傷がついちまうかもしれねえ。勘弁しておくんないよ」

パルダリスはレル・ヴァリスに促されながら口走っていた。「形あるものはいずれ壊

れる。だが人さえ！ 人さえいれば！」

またたく間に戦闘が始まった。大剣を振りかざして襲いかかるアンベレオ兵二名は氷の壁にぶち当たり、空気の重しに押しつぶされた。魔法使いと上級賢者が相手だとなるのだった。もう一名はヒューダーとマミヤの跡を追おうとしている。それを見たパルダリスはレル・ヴァリスを突き放した。

「そなた、ヒューダーとマミヤを助けてやってくれ！ なに、この地下空間は私の庭、勝手はわかっている。老人ふたりを逃がすことくらい朝飯前だ」

「え、しかし、パルダリスさん！ あなたはケガを！」

「度重なる事件でちと呆けているがコモラ師は最高賢者、ケガの治療ならやってくれるさ。大丈夫だから。さあ、行って！」

うなずきかけてくるコモラにレルは目礼した。

「パルダリスさん——みなさん、どうか、ご無事で」

紺藍のマントがひるがえった。人工照明が作り出す光と影に照らされたオブジェの間を走る。マミヤとヒューダーと、その追手を追って。

＊

ヒューダーとマミヤは来た道を走った。背後からは追手、不案内な地下空間を逃げ回るよりも広い場所、総督府へ戻った方がいいとヒューダーは考えた。そもそもそこにはマミヤが求める者がいるはずだ。

走りながらヒューダーは尋ねた。「怖くないか」と。するとマミヤは明るい目でヒューダーを見上げた。

「牢屋の中では死ぬほど怖かったわ。でも今は平気。だって——また会えるもの」

ちら、とヒューダーはマミヤを見た。また会える……？

マミヤが見た夢と同じ場면을、ヒューダーが彼の視点から夢見ていることを、マミヤは知らない。

先だって通ったルートを辿っているだけに、また目標が定まっているだけに、彼らの足取りは速かった。一方、二人を追っているアンベレオ兵は地下美術館というもの珍しさにきょろきょろしていた。なにしろ金目のものが山のように並んでいるのだから。するといきなり背後から飛んできた短刀が右肩に突き刺さった。

「おのれ、いきなり背後からとは卑怯なり！！」とかなんとかわめいているうちに鳩尾に蹴りを入れられ、手足を縛りあげられ、猿轡をかまされてオブジェの台座のかげに放られた。一丁上がりである。レル・ヴァリスはぱんぱんと手をはたき、マミヤたちの跡を追う。

567.

「どこへ行っておったのだっ！！」

ドゥルは三角にした目をさらにつり上げてシパドをねめつけた。「いよいよ国王陛下が御成りというときにつっ！！ おまえというやつはっっ！！！」

「夫の仇（かたき）をつかまえに」

シパドの頭の中はそれでいっぱいだ。幼なじみのレガリオ王はどうでもよかった。ドゥルの態度も目の色もころりと変わる。胸中は妹と似たり寄ったりなのだ。

「なんと！ 犯人が見つかったのか！ どこの何者だ！？」

「あの女だ。マミヤという外国人」

「おまえが捕らえて牢に入れていた、あの？ ——あれ？ 恩赦が決まって……釈放……婿どのが殺されたのは…うん？ 時系列おかしくないか？」

「時系列などどうでもいい！！」シパドに一喝されてドゥルは宙を飛んで部屋の隅まで吹っ飛んだ。

「い、いいいや、あの、どうでもよくないと思いますが……」

「あの女には仲間がいたのだ。首謀者はあの女、実行犯は女の仲間だ」

「な、なななるほど」

シパドの脳内では実行犯の目星はとうについていた。牢には極悪人が収監されていた。ネウトラ評議会の二名だ。

この文明社会には、ネウトラ評議会を知らぬ者はいない。長い歴史、様々な功罪をも併せて、その高名は黄金門と並んで泣く子も黙るというもの、百歩譲ってバイスロイがただのあだ名ではなく、その名の通りに黄金門の本物の後継者だとして、そしてまた、総督の夫という身分の者を、暗殺するにはそれ相応の立場の者でなければならなかった。バイスロイは名も知れぬ刺客に襲われてはならなかったのだ。

すうっとくちびるを引きあげ、シパドは微笑した。それを見て、ぞぞっと怖気を振るいながらもドゥルは背筋を伸ばした。

「う、うむ、そういうことなら婿どもの浮かばれるというもの」

「そうだ、そういうことならベレオーサ家の名に、より箔がつくというものだ！ よし。妹よ、あとは兄に任せろ、このことを陛下や皆のまえで暴露してくれる！ それからおまえ、その格好をなんとかせい。陛下行幸という祝賀の場に黒衣はまずい！」

＊

シパドを着替えに追いやり、ドゥルはあたふたと部屋を飛び出した。もうかなり予定の時間を押している。バルコニーに登壇する国王を出迎えるためにシパドか自分がその場にいななければならない。

連日街中を騒がせていた歓迎のお祭り騒ぎは今は納まっている。総督府前の広場を埋め尽くした人々は、アンベレオ王国国王レガリオがバルコニーに姿を現し、民衆に手を振るのを息をひそめて待っているのだ。しん——と音がするような静けさ。

一方。シパドの黒衣を脱がせた老侍女が血の匂いに気づいて思わず顔をしかめた。パルダリスを斬った際の返り血だ。老侍女は祝賀の式典に血の匂いはまずかろうと、身を清めることを進言した。シパドはいっしゅん、レガリオに会うだけなのだから湯あみなど必要ないと思った。兄ドゥルも時間がないと言って神経質になっていた。今、日没に近い時刻だが、日付が変わる深夜には此度の式典の最大のイベント、『神々の再来』祭の祭祀が行われる。その瞬間の時刻は決して決して、動かせないからだ。

シパドは無表情に笑った。待たせてやろう、と。国王だろうが、神々だろうが、待た

せておけばいい。そうだ、湯あみが先だ。たっぷりの湯と泡立てた石鹸で、身に降りかかった不快な塵芥を净めねばならない。それが済むまで、式典はお預けだ。

## 568.

ヒューダーにとって総督府は勝手知った場所だったが、シパドの居所を探り当てるには手間がかかった。壁の中を綿密に計算された無数の連絡通路が走っているのだけけれど、侵攻してきたベレオーサの人間たちには煩わしい以外の何ものでもなく、活用できるものではなかった。むしろ混乱のもとになった。そのためヒューダーの知っている通路の多くは使えないように封じられていたのだった。

通路は幾度も行き止まり、あとから無理やり開けたのだろう荒い造りの新通路を発見するに至っては、ヒューダーはついにこらえにこらえていた舌打ちをもらした。こんな所に通路を開けるとは！ 侵攻者たちはこの台形ピラミッドをなんにも理解していないとわかったからだ。跡を付いてきていたはずのレル・ヴァリスはいつのまにかはぐれてしまっていた。

(まずいぞ——まさかこんな所で迷子になるとは——ここはオレが知っていた総督府とは似て非なるシロモノだ)

冷や汗だか脂汗だかわからない汗が背筋を流れる。冥界の底ミクトラン並のやっかいさだ。ヤスウかダーヴェか、透視能力者に同行してもらうべきだったと悔やんでも後の祭りである。はぐれたレル・ヴァリスが気になるがどうしようもない。

「ヒューダー」ふいにマミヤに呼ばれた。

(ああ、すまん、ちょっと考え事してた。少し戻って別のルートを行ってみよう)

(あのね、なんか水の音がしない？ それに、足元が濡れてるんだけど)

通路に使われている石材は微光を放ち、音を吸収してしまう。通路全体をほのかに照らし、足音も聞こえない。そんななかで、たしかに……水の音が……。ヒューダーは台形ピラミッド内の“間取り”を思い浮かべた。だいたい総督の執務室と私室のあたりを指して進んできて、今、その周囲をさ迷っているはずなのだ。ということは、この水は？

(ねえ、これ、お湯よ、あったかい)

言われて見れば、壁際の床の色が濃い。(湯がしみだしている？ いや、このあたりにそんな配管はされていなかったはず……)

ヒューダーは壁を触り、ぐるりと見渡し、少し離れ、力まかせに蹴った。はたして、安普請の石の壁にびしびしと亀裂が走った。その亀裂の隙間からもわっと湯気。

とたんに魂ぎる女の悲鳴。

「まさかお風呂場!？」

マミヤの困惑の声をよそに、ヒューダーは念入りに亀裂を広げ、とうとう壁を崩してしまった。

569.

浴室は換気されていなくて、湯気がもうもうと立ち込めていた。ヒューダーはほとんど情けなくなった。総督府ピラミッドは間違いなく地上最高の叡智と技術で造られたものだ。たとえ地上文明が滅びてもこれだけは壊れずに残るだろうといわれたほどの建造物。それを、こんな粗雑で杜撰でいい加減な扱い方をされたのでは。女の湯あみで傾いたなどと、いくらなんでもそんなことを後世に残せるか！ ピラミッドがかわいそうすぎる！！

浴槽から立ち上がっているのは明らかに若い女だ。幸か不幸か湯気のせいで細部までは見て取れない。しかし、入浴中をいきなり壁から踏み込まれたにしてはへんに様子が落ち着いている。

(今さっきの悲鳴はこの女ではないのか?)

すると、湯気の向こうから、  
「壁から登場とは。やっつけてくれますね」

「レル・ヴァリス!？」 「なんでそんなところに!？」

「途中で道に迷って、適当に壁を押したら本通りに出てしまったんです。そしたら、女性しか見当たらず。いちばん年配にみえたひとをつかまえてご主人のところへ案内してくれと頼んだんですよ」

「ふーん、女性のご老人に剣を付きつけて？ わりとすることが非道ね」

「なんとでもいってください。でも、みつけましたよ、マミヤ、そこにいるのがその人。そうだろう？ ベレオーサ・シパド」

570.

「マミヤだと？」

立ち込めた湯気はヒューダーが開けた壁の穴から外の通路へ吸いだされていく。すると全裸の女が現れた。レル・ヴァリスは眉を寄せて声をかける。

「ベレオーサ・シパド、われわれは貴女と話し合いに来た。そこから出てなにか着るんだ。すぐに」それから老侍女に、「着るものを用意してくれ」

老侍女は言われるまま、あたふたとバスローブを取りに行った。シパドはちらっとその動きを目で追い、それ以外は身動きひとつせず、むしろ堂々として浴槽のまんなか立っていた。

ヒューダーは妙な気がした。若い女のみごとな裸身を眼前にしているのだがなんの感慨もわからない。バイスロイはいったい何を考えていたのだろうかとさえ思った。この女からは人間味というものがまるで感じられないのだ。それどころか、たしかにそこにいるのだが、そこにいる、という実感がない。いってみれば——人間の形をした虚無？ ぞくりと悪寒を感じるのと同時に声を聴いたような気がした。

(キラツケロ！)

はっと目を見開いた時。

老侍女からローブを受け取ったシパドの右手がぐるりとひるがえった。きらり、と鋭く黒い光が走った。光はまっすぐに、マミヤに向かった。

「あ」、とマミヤの短い声。

まったく一瞬の出来事だった。寸鉄も帯びていなかったはずのシパドが刃物を放っていた。あるじがあるじなら侍女も侍女だ。老侍女はバスローブの陰で小さな刀子を手渡していたのだ。

571.

「マミヤ！！」

ヒューダーとレルは同時に叫んでいた。マミヤの胸の真ん中に黒曜石の刀子が突き刺さっている。呆然とした目をシパドに向け、マミヤはゆっくりとくずおれた。

ははっとシパドは乾いた笑い声をあげた。「どうだ、あたしのバイスロイをたぶらかした黒曜石の味は」

この刀子はゴンの短刀のなれの果てなのか。衝撃にヒューダーはなにも考えられない。腕の中のマミヤの体の重みが現実のものとは思えない。

「ヒュー……ダー……、だいじょうぶ、また会えるから。レルも……だから……とうさん……ごめんね、もいちど…会いたかつ……」

「こんなバカなことが！ マミヤ、ホシナ族はすぐそこまで来ているんだ、きみの父上  
が率いて——」

その言葉が届いたのかどうか。マミヤは微笑んだ。最期にそのくちびるが動いた。イ

リチャ、と。

572.

「ヒューダー、マミヤを連れて、行ってください。この女は僕が引き受ける」

「——しかし！」

「しよせん、あなたは文官、こういうことには慣れていない」レルはシパドに目を据え、すらりと剣を抜いた。「多少剣が使えたとしても、レベルの高い相手には通用しません。素人には引っ込んでもらいましょう」

「う……さっき、何か言ってたな、ホシナ族がどうか……」

「細かいことはいえませんが、彼らは来ます。『化学者の館』へ」

「……………」

「僕のことはご心配なく。このフロアには女しかいない。どうとでも切り抜けられる。あなたは一刻も早くここを脱出してください。最上階に格納庫があるでしょ。そこにあなたが世界の果ての島から乗って来た航空機が置きっぱなしになってる」

「どうしてそんなことまで知ってるんだ——」

レルは笑って親指で自分の背後を指した。

「僕には守護神がついてるんです。あとはまかせろと言ってます」

シパドはふたりの会話をよそに悠々と濡れた髪を拭き、着替えている。レルはシパドとヒューダーの間に立ち、ヒューダーはレルの背後を回って部屋の出口へ向かう。老侍女は大きな花瓶を侵入者に投げつけようとしていたが、ヒューダーに鬼のような凄まじい形相を向けられ、気力が消し飛んでしまった。レルはこのフロアには女しかいないと言ったが、女だろうが年寄りだろうが、ベレオーサの人間には誰ひとり気をゆるしていない者はいなかった。ヤスウだったらこういうだろう。「どいつもこいつも性格わりいぜ」

はたして。航空機までたどり着けるか……

「そういうことなら——まかせた。その守護神によろしく」

「いいからさっさと行けと言ってます。気が短いな、このひと」

レルはいつときほくそ笑み、ヒューダーとマミヤのなきがらを一瞥した。

「ベレオーサ・シパド。貴様のような非道な人間はみたことがない。かかってこい、生きてここを出られると思ったら大間違いだ」

## 573.

同じころ。ヒューダーとは違う状況、違う理由でドゥルは冷や汗と脂汗にまみれていた。

国王陛下はとうに到着あそばし、罪のない天候のあいさつなぞ交わして此度の行幸と、共に行われる祝祭の話題でひととおりの盛り上がったのだが、肝心のシパドが現れない。彼女の気まぐれはいつものこととはいえ、気まずい空気が徐々に豪華な控えの間に立ち込めてくる。問題はすでに外の広場に集まっている民衆だ。しんと張りつめていた空気にじわじわと変化が生じ始めている。

まさかとは思ったがこんな時でもシパドは当てにできないとわかってドゥルは腹を括った。というか、小心者の彼は「まかせろ」と言っておきながら、実はこっそり妹を当てにしていたのだ。しかし妹も怖いが民衆も怖かった。そこで彼はついに、しかたなく、立ち上がった。そして妹シパドが結婚しようとしていた相手が殺されたのだと、

国王に打ち明ける時が来た。

レガリオ王の驚きは尋常ではなかった。聞けば事件が起こったのは王がその男バイスロイを夕食に招いた晩の、翌未明だという。あれが心許した友との最後の晚餐だったというのか。王はショックに震えて「何故だ」と問うた。

「何故……それはあまりに重大なことであるため、妹シパドもまたショックのあまり倒れてしまい未だに起き上がることが難しいありさま。しかし、打ち明けましょう。陛下、なにとぞしばしお時間をいただきたく」

\*

「なんと——シパドの婚約者どのは、ネウトラ評議会の手にかかったというか——」

レガリオ王にしてみれば晴天の霹靂もいいところだ。過日耳にしたバイスロイとイリチャとの会話からすれば、バイスロイは評議会の者と共に旅をしており、立場など関係なく互いに信頼関係を結び、友情を築いていたことがわかる。ふたりの会話はごく自然なもので、自然に生まれた関係からの話題であったゆえに、レガリオは違和感も疑いもなく、事実として受け止めていた。

バイスロイという名が偽名かどうかの真偽はレガリオには不明だが、ドゥル曰く、バイスロイは正真正銘、黄金門の人間であるという。黄金門がベレオーサ家と結びつくことを恐れた評議会がバイスロイを暗殺したというのだ。ドゥルの話からは、シパドがこだわったマミヤの存在はどこかへ消えてしまっていた。彼の口調は次第に熱を帯びてきた。

「わたくしどもはネウトラ評議会の者を二名、別件にて捕らえてございました。しかしわがベレオーサ家婚儀の慶事から罪を減じられ釈放となりました。二名は釈放されたその足で婚約者どのを刺殺したのです。信じられぬことです。恩赦を逆手にとり、そう、

恩を仇で返したのです。それも婚約者どこの、『黄金門』という出自ゆえに！！」

広場に集まった群衆がざわつきはじめていた。たしかに国王レガリオのお手振りの予定の時間が過ぎている。が、群衆を動揺させたのはそれだけではなかった。

\*

「すげえ！　ダーヴェ先生！　こんなことできるんだ！」

「なあに、どおってこと、ありませんよ。上級賢者のわざとしては、しょうもないですけどね」

ドゥルとレガリオの会話がすべて大音響で外に流れていたのである。

## 574.

ドゥルの告発に黙っていられなくなった輩がいた。実際にバイスロイを手に掛けた『実行犯』たちである。彼らはメッサナにおけるバイスロイのかつての仲間だった。彼らもまたバイスロイという名は偽名だと思っていた。黄金門の後継者などという分かりやすい偽名を使うとは思っていなかったからだ。かつて親しく付き合った仲間が、ドゥルのいうように、本物の黄金門の後継者だなどという言い種はウソだった。そして、実行犯は評議会なんかではない。ここにいる我々だ！

彼らはずいに声をあげた。ウソをつくな！　総督家は明らかにウソつきだ、と。

騒ぎに気がついたドゥルが大慌てでバルコニーに転がり出た。そしてそこにいたのは獄中に捕らえてあった極悪犯の顔だった。

「お、おまえは！！」

「はい、ネウトラ評議会巨人族調査団団長。名はダーヴェ」

「う……しかしもうひとりはその小男ではなかったはず！」

「おうよ、小男でわるうござんしたね。けど俺は正真正銘、評議会の人間」

「し、証拠を見せよ、評議会の者なら身分証を持っているはず！」

「おお、評議会の身分証ときたね」

ヤスウは思わずにとっ笑った。そして群衆に体を向けた。

「俺の評議会の身分証はある人が持ってる。メッサナの市民の皆さんよ、誰だと思う？

ボムソワール・メルノ。この名を知らん人はメッサナのモグリだ。

だって、あんたらが寄ってたかっていじめ倒しておっぼり出した、何の罪もねえ音楽家だからな。俺はこの娘に出会って、助けてやりたくて、俺の身分証を渡した。それである遠い国が、メルノを亡命者として受け入れてくれた。いわば俺はメルノの保証人だ、身分証は今も彼女が持っているはずだ。メルノはそういう、信頼していいって思える娘だったのさ。

んでもってよ、聞きてえことがある。

メルノはある男と深く惹かれ合っていた。そのこと、ふたりと付き合いのあった芸術家の皆さんはよく知ってるはずだよな。男の方はバイスロイって名だ。あんたらはそれを知ってたもんだから、バイスロイのやつ、新しい支配者に取り入るとは許せんってって、裏切り者と呼んで、襲ったんじゃねえのかい？ 違うかい？

けどな、バイスロイさんがシパド総督に近づいたのは、シパドの強引なアプローチをかわそうとして無関係な人を巻きこんじまったからだ。たくさんの人の心を深く傷つけちまった。そんな自分が許せなかったんだ。それで自分のやったことの責任をとろうとした。

あの人は態度でかくて偉そうで鼻持ちならねえとこがあったけど、ほんとはそういう

人なんだよ。そういう人だった。短い付き合いだったけど、俺は、あの人が嫌いじゃなかった。

あの人の本当の身分なんて俺は知らねえ。俺だけじゃねえ、誰も知らねえんだぜ、けど、仲間だと思ってた。責任感が強くて優しいひとだった。

そういや、バイスロイさんをたぶらかしたとか言って、マミヤを親の仇みたいに追い回していたシパドのねえさんはどこ行った？　さいしょ、バイスロイさんはマミヤの仲間に襲われたんだとか言ってなかったか？　えらくシナリオが変わったもんだな。え？　おっさん。

評議会が、ベレオーサ家と黄金門が結びつくのを恐れた、だ？　なんで評議会がそんなもんおそれなきゃならねえんだ？　——評議会を侮辱する気か？」

「ひよ、ひよひよひよ評議会はどえらい罪を犯しているのだぞ、みな、騙されてはいかんんん！　連中は大陸全土を滅ぼしてしまったのだ！」

群衆のざわめきが低いどよめきが変わった。その事件はメッサナ市が封鎖された後のことだから、ここにいる者たちは封鎖されていることも外でなにが起こっているのかも、何も、何も知らされていなかった。

音楽生を迫害した一連の事件で、メッサナの人々は己のした仕打ちのおぞましさに気づいていた。己の口が音楽生を罵り、根拠のない噂を面白がって憎悪する快感に浸った。己の手が石を投げ、彼女の家火をつけて歓呼を叫んだ。それらは他人の仕業ではない。まぎれもない、己がやったことだ。そう、我に返り、自己嫌悪の深い淵に沈んで、新しい支配者の虐待的統治に抵抗する気力など、微塵もなかった。これは己のしたことへの罰だ、そんな心理が働いていたゆえに、旧市民は唯々諾々とベレオーサの成すがままになっていたのだ。

しかし、メッサナ市以外の土地のほとんどが汚染され、生き物が生きられない状態になっているという時に、アンベレオ王国は神々の名のもとに、メッサナ市を舞台にお祭り騒ぎに興じていたとは――

人々の目に、初めて怒りの火が点った。

ドゥルは自ら火を点けてしまったのだ。

第三十九章 『混沌・後編』

第四十章へ続く



## 第三十九章のあとがき

前回のあとがきで、うっかり次が最終だと書いてしまった。まあ、納まりませんでしたね。次回へ続きます。

2024年5月23日 記

## これまでのあらすじ

### 第一部

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可と依頼によるものだった。

ネウトラ評議会・学術調査団の団長ダーヴェとヒューダーとがホシナ族のもとへやって来た。絶滅危惧種・巨人族の調査のためである。しかし巨人族の姿は見え、ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤが行方不明になる。ダーヴェの痕跡を追って島を離れた団員ヒューダーとヤスウは移動中に緊急事態信号を捉えた。ヒューダーは信号発信元のエウメロス王国へ、ヤスウはダーヴェを追ってケストル王国へ向かう。

エウメロス王国は巨人族の大群に襲撃されていた。ヒューダーの説得で国王は城を棄てて避難、ケストル王国へ赴いたまま帰国できずにいる王女ヘルガを迎えに、近衛隊長レルはヒューダーと共にケストル王国へ。

エウメロスとの国境付近にはケストルが密かに造った離宮と闘技場があった。そこにはヘルガ王女もマミヤも捕らえられていた。ヒューダーたちは評議会の人間として離宮に入り込むが、ひとりの少年を密入国させたとして捕らえられてしまう。

成り行きからヒューダーは少年にイリチャという名を与え、闘技場で戦うことになる。

### 第二部

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチャを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。行き場を失い、郊外の湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。

同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を離れてメッサナを目指していた。

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理パルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

### 第三部

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ある日、アマセオの妻に三つ子が生まれたという知らせが届いた。自身も三つ子であるアマセオは困惑する。三つ子は王位継承の証しであり、その存在は間違いなく混乱をもたらすからだ。

妻子に逢うため帰郷したアマセオは、妻の兄タマシギと語りあううち、タマシギが秘める野望を知る。機織りのシトリ族の立場を盤石なものにしたいがために、タマシギは禁忌に手を染めていたのだ。アマセオが己の前に立ちほだかろうとしているのを感じたタマシギは政庁のフツヌシに訴え出る。フツヌシは王の兵士であるアマセオがホシナ族に接近していることをかねてより懸念していた。そんな折、三つ子が怪鳥にさらわれるという事件が。怪鳥の正体はアマセオの弟だった。生後すぐに間引きされた弟カガセオは、手をかけたタマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のために手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

黒曜石事業の権利を拡大解釈したとの理由で、フツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。そこには王位継承が絡んだ陰謀が大きな影を落としていた。現王と深い関係にあるホシナ族、ホシナ族に近づくアマセオは陰謀と戦いに巻き込まれたのだった。

ホシナとアマセオは旧知のヤサカオの助力を得、フツヌシ軍を迎え撃つ。

### 第四部

母国エウメロスへ帰還した王女ヘルガを待っていたのは、黄金門市の皇帝。彼らもまた巨人族襲撃によって故郷を失っていたが、その際エウメロスの国土へ直行したのは、そこには太古の地下都市・『トゥランの七つの洞窟』への入り口があったからだった。

巨人族の跳梁に、地上での生活を諦めねばならなくなったエウメロスと黄金門の人々は地上への出入り口を閉じ、地下都市へ向けて地下道掘削に取りかかる。

同じころ、ネウトラ評議会は巨人族を殲滅させるべく原子爆弾の製造に乗り出そうとしてメッサナの化学者団と決裂する。爆弾製造の協力者として名乗り出た評議会西支部のコパーン博士は、製造工程の最後に使う素材、ブルー・マーキュリーを無人偵察機に搭載して送り出すが、偵察機はケストル王国北方の氷河地帯で制御不能に陥る。

ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっている皇帝の息子バイスロイ救出に向かう。

世界の果ての島からホシナ族に同行してきたスクナは旧知のヘルガと合流し、ケストル王国へ向かい、氷河決壊に巻き込まれる。

### 第五部

太古の偉大な種族は世界中を結ぶ転送システムなるものを構築していた。そのステーションのひとつがケストル闘技場の地下にあり、ヘルガたちをいずこかへ転送する。彼らが到着したのは冥界最下層ミクトランであり、迎えたのは行方不明になっていたネウトラ評議会のダーヴェェだった。

ダーヴェェは仲間のヒューダー、イリチャと共に巨人族を探索してミクトランへとたどり着いていたが、あまりに広大複雑な異次元空間での探索は遅々として進んでいなかった。しかしヘルガ、スク

ナ、バイスロイが合流したことによってメッサナで起こった音楽生迫害事件について情報交換が行われる。迫害されたメルノとバイスロイとは深い繋がりがあったのだ。メルノが今はミツハと名乗り、その外見がイリチャに酷似していると知ったヒューダーは困惑する。かつて水精霊から生まれた子が名を取り上げられ無力な水棲生物に姿を変えられたという。『ミツハ』とは水精霊を意味するのだ。世界の果ての島からついてきたイモリに、イリチャ=槍と名づけたヒューダーだったが、彼に戦いを宿命づけてしまったかもしれないことに責任を感じる。スクナとヘルガとはミクトラン脱出を敢行、そして、ミクトランの怪物が大挙して襲い来るさ中、イリチャはミクトランの女王テクトリの手に落ち、巨人族生成の現場を見せられる。

## 第六部

テクトリらの前に突然現れた男は、底知れない力でテクトリとベネトナシュの巨人族増殖計画を簡単に握りつぶしてしまった。イリチャの懇願によってダーヴェたちは地上、メッサナへ送られ、イリチャは連れ去られてしまう。事態のあまりの急転はダーヴェたちに無力感と敗北感とをもたらし、メッサナ住民と苦楽を共にしてきたジャガーはアンベレオ王国の命令で全頭が捕獲されることに。ヒューダーはマミヤと再会し、つかの間の安らぎを得る。

そんな折、放火されたメルノの実家の前でバイスロイはひとりの女に出会う。ベレオーサ・シパド。彼女はアンベレオ本国から乗り込んできた先遣隊長で、バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受け、彼にメッサナ奪還記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。記念硬貨に刻まれるモデルとは、神の代理人たるイリチャだった。

メッサナ市はベレオーサ市と改名され、新総督となったシパドはバイスロイに求婚するが、断られる。このことに逆上したシパドは意趣返しに次々と恐ろしいことを企み、全市民を恐怖に陥れるのだった。

## 奥付

Salamander in the circle

第三十九章 **混沌**

2024年5月25日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

---